

などで敵に発見されんや各々方の考や如何に」樋口「我君にしては敵に命惜しみて落ちたりと潮けらるるを恐れ名を重んじ節に殉せんとの御心は臣の意を得たり然りと雖我家は容易く失ふ可からず一時の名を好みて死を撰びたらんには先祖に対し申訳なしこの期に際し卑怯に似たれども再挙を目ざして一時の恥を忍びてこそ最善の方策と存じ候へ」原「樋口殿の御意見我意を得たり我もしか思ふなり幸に相馬は伊達とは年来の仇敵仙道悉く伊達に屈せしに独り彼靡かず恰も我宗と相通ず我れ相馬へ投ずるは名分立ちて相馬必ず我と盟せん全くこの計は万全なり我君早く考慮召されよ」周防「丹波其方の考もそこにあるのか」丹波「君の御意に反し一時の命を保たん事心苦しく存じ候へ共屈するも伸びんがため我君御心を決して然るべし」周防「我は最後まで一兵の存する迄力闘して城を守り名を全うせんとは存ずれ共斯くしては臣下を思ふの情にあらず臣は主の為に命を捧げば主たるもの臣下を思はねばならぬ、後凶を計るは君臣一致両全の方策なり然りと申せ洵に遺憾なり」丹波「御推察申します」周防「嗚呼天命なる哉時の運とは云へ乍ら我家は彼れ伊達家と共に元弘、延元の昔我祖手渡八郎義為伊達四十一騎の強勇無隻の驍將この館山の城に義兵を挙げ南山の帝に忠勤を擢んで辱けなくも義良親王を擁して東北の兇賊を討平すべく靈山城に立籠れる將軍北畠顕家郷に従ひ城を死守し將軍上洛後、後顧の患なからしむ可く奮闘遂に命を城と共に靈山の露と消え果て子孫代々正義の兵を擁して地の利を得ざる此館山の城に社稷を保つ一百有余年、奥州の大半を従ふ伊達へ靡かず今に至り命惜みて逃れたりと嘲笑されん事、千秋の恨事其方共余の心情を思へ」周防は言ふに堪へず立ちては坐し幾度か嗟歎稍々久しうす、一同声なく鳴咽す。周防「さりとて恨重るは伊達政宗我力及ばずして彼に敗るるも何時か此の恨をはらさで置く可きか」と慷慨数刻。周防「然し嘆くまじ全く其方共の勧めに従い再挙を図る事